

チョコレートは渡されるべきだったのか

ピーピンアッタマート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バレンタインにチョコレートを渡したい。

それは願いで、希望だった。

目次

チョコレートは渡されるべきだったのか

1

チョコレートは渡されるべきだったのか

バレンタインのその日でも、学校自体も何も変わらない。

まどかがいつも通りに起きて、お父様に挨拶をして、お母様を起こして、朝ご飯を食べて、学校へ行く。強いて言うなら、誰にチョコレートあげるとか、あげないとか、そんな会話があつて、まどかが友達からチョコを受け取ったくらい。

本当に平和で、穏やかな一日だ。

そんな中、いつもとは少し違う出来事が現れた。学校に向かうその瞬間、美樹さやかが、突然まどかの両目を覆ったのだ。

「へっ？ さやかちゃん？」

「おおっと、抵抗しなーい」

「んっと、いいけど、どうしたの？」

背後から目を覆われながらも、まどかはさほど慌てていなかった。

どこか戸惑いがちな声をあげつつ、言われるがままに大人しく、されるがままに視界を隠され続けている。

片手をまどかの目隠しに使いながら、美樹さやかが自らの鞆の中へと手を入れた。

その時、冷たい風が吹き、彼女達の間を通り抜けた。

「さむっ、もっと密着して良い？」

「うん、いいよ」

美樹さやかがもう少し身体を寄せると、まどかの背中と触れ合った。そして指先をまどかの柔らかそうな頬に当て、足を絡める。

「ひあっ」

「おおー……まどかあったかい」

「さ、さやかちゃん、なんか冷たいね」

「でしょー。体冷えちゃって」

「まどかで暖をとりつつも、美樹さやは手元の荷物から何かを器用に取り出した。

それは一つの小さな包みで、片手だけで剥がされたその中には丸い

チョコレートが入っている。

美樹さやかは、目を覆われたままのまどかかと更に密着して、チョコレートを持ったその手をまどかの顔へと近づけた。

「はい、まどか。口開けてー」

「え、うん」

白い吐息が漏れる口へ、美樹さやかの二本の指が侵入した。

指はあっさりともどかの舌へチョコレートを置き、すぐさま去っていく。

何が口へ入ったのか、その甘い風味で理解したのだろう。まどかのはっとした表情となり、嬉しそうに口を閉じた。

「よし、口動かして良いよ」

「ん……」

小さなチョコ一つを味わうには非常に味わい深そうに、一口口を動かす毎に瞳をきらきらと輝かせて、彼女の喜びが周囲に強く伝わる。

まどかは、ゆっくりと食べきった。

「どう？」

「おいしいー」

「でしよー？ ちゃんと作ってきたんだよねー」

得意げに笑う美樹さやかに向かって、まどかも楽しげに頷いた。

「ほら、まだまだあるよ」

薄桃色でラメの線が入った袋が、まどかに手渡される。中身はホワイトチョコレートだ。

まどかは嬉しそうにそれを受け取って、眩しい笑顔を浮かべた。

「ありがとう！ じゃあ、わたしもっ」

まどかが手元の袋を持ち上げた。

「その紙袋つてき、やっぱり」

「うんっ、わたしも持ってきたんだ」

中から取り出された小さな紙の箱が、美樹さやかの元に渡された。楽しげに受け取りつつ、美樹さやかはしげしげと箱を眺める。

美樹さやかの名前が入った、デフォルメされた動物のシールが貼ら

れている。箱は爽やかな青色が主体で、渡す相手の色に合わせているのが分かる。

「ありがとう、これって手作り？」

「うん。パパと一緒に作ったんだよ。トリユフチョコなの」

「へーえ。他の奴も同じなの？」

「うん。いっぱい作ったから。これは杏子ちゃんの、これは仁美ちゃん」

「おお、箱は全員違うんだねえ」

幾つか取り出して見せていると、美樹さやかが、まどかの持つ袋の中から、一つを取った。

その箱は紫色をしていて、名前のシールがどこにも貼られていない。

「これは？」

「えっと……さやかちゃんのだったかな」

「え？ じゃあさつき貰ったの、あたしのじゃなかったの？」

「……あれ？」

怪訝そうな顔のまどかに対して、美樹さやかは自分の青い箱の全体を確認した。

「ごっちはあたしのだよね。名前入ってるし」

「うん。さやかちゃんに渡したのは、さやかちゃんの方で合ってるよ」

「じゃあ、それは誰の？」

「……」

黙り込んだまどかの反応から、何を感じたのだろうか。

美樹さやかは急に悪戯っぽい笑みを浮かべて、まどかの肩を抱いた。

「じゃあ、ひよっとして本命かなー？」

「あ、いや、ちがくて……あれ？ 友達用に作ったんだけど……このチョコ、誰のだったけ」

不思議そうに、誰の名前も入っていない箱を撫でる。

どの箱も丁寧にラッピングされている。渡す相手のいない物も例外ではなく、まどかが嬉しそうに箱を包む姿が、目に浮かぶ様だった。

まどかにとっては、全部が本命。一つ一つに愛情と優しさのこもった箱の包みを見ていると、そう言われても納得できてしまう。

「本当に、本命じゃないの？」

「うん、ないよ。相手も特にいらないし……」

「ふーん。なんか残念な様な、安心した様な」

美樹さやかは、まどかから貰ったチョコレートを開けて、一つ食べた。

まどかが少し期待した風な目で見ている。

「うん、いいじゃん。美味しい」

その視線に気づいたのか、美樹さやかはまどかの頭を軽く撫でた。髪型が崩れない程度の、優しい触り方。

まどかは、その手をちよつと照れながらも素直に受け入れていた。

「えへへ……そうかな」

「にしても、本命もないのにずいぶん頑張ったね」

「うん。せっかくだから作りたくて……それに、こんな風にね、みんなと一緒にチョコを食べたかったんだ」

美樹さやかは、まどかに抱きついた。

「まどかー！ まったくかわいい奴！ 男になんかやらないぞー！」

「ふえつ。えへへ、もーさやかちゃん」

「よーしよし。はいまどか、もう一回口開けるー」

「んっ……うんっ。さやかちゃんも、食べて？」

「あー……っん。あははっ、まどかの愛情を感じるー！」

二人は抱き合ったり笑ったりしながら、その場でチョコレートを食べさせた。

このままだと学校に遅れそうだけど、それは良いのだろうか。ううん、まどかが嬉しそうにしているから、良いのだろう。むしろ、どこにも問題などない。

「さやかちゃんは誰にあげるの？」

「ん、まどかとそんな変わらないよ？」

一歩一歩ずつ進む毎にふざけたり、会話を楽しみながら、二人で仲良く学校へ向かっている。

やっぱり、二人は本当に仲がいい。大切な友達だというのは、まどかから何度も何度も聞いた。例えば後からどんな者が現れたって、まどかの一番の友達に美樹さやかなんだろう。

まどかには、友達がいる。まどかを愛してくれる友達がいる。まどかを見てくれる人がいる。それはとても素晴らしい事に思えた。

まどかが笑ってくれて、誰かと一緒に学校へ行く。それはとても輝かしくて、素晴らしい光景だったのだ。

私も一歩踏み出して、二歩踏み出して、三步目には足早に、まどかの元へ向かった。

今なら、流れに任せて言える気がする。渡せる気がする。

まどかの背後まで迫ったその時、私はその背中へと声をかけた。

「まどか、貴女に渡したいものがあるの」

+

「えっ？」

振り返って、声がした先を見る。

さつき、わたしが通り過ぎた場所だ。

そこには誰も居なかった。

「まどか？」 さやかちゃんが、首を傾げる。

「あ、えっと……今、誰かに呼ばれたようなの？」

「？ いや、聞こえなかったけど」

さやかちゃんは本当に聞こえていない様子だった。

でも、私の耳には確かに聞こえた。助けを求めている様な囁く声

が。
「そっか。気のせいかな？」

空耳だったと納得しても、その声をどこかで聞いた気がしていた。わたしが転校した時、隣に誰かがいた。一緒に廊下を歩いた。とても大切な事だった筈なのに。

思い出せない。

それがもどかしい筈なのに、手を伸ばさなきゃ、いけない筈なのに。

「……」

袋の中の箱を見ていると、その予感はより強くなった。

このチョコレート。

喜んでほしいなつて、一緒に食べようつて、頑張つて作ったのを覚えてる。

それなのに、誰に食べて貰おうと思つたのか、それがどうしても思い出せなかつた。

「あつ」

思考に沈んでいた時、わたしの手を誰かが握る。

顔を上げると、さやかちゃんが朗らかに声をかけてくれた。

「ほら、学校遅れるよ」

「ご、ごめん」

さやかちゃんと手を繋いだまま、学校までしつかりと歩む。みんなにチョコレートを渡す為にも、今日は遅刻なんかできない。

みんなにチョコを渡す。

そう考えた時、もどかしくて、そして、寂しい気持ちが心に走った。

+

部屋のイスに座つて、何をすることもなく天井を見つめる。

その先に見えるのは、欠けた月と、まどかの嬉しそうな顔だった。

鼻歌まじりにベッドへ転がり、枕の上に頭を乗せる。左手の甲にそつと触れて、今も、自分がまどかを維持できている事に安堵した。

「頑固だね、君も」

不愉快な声が耳に届いた。

顔を少しだけ上げると、インキュベーターが机の上に座り込み、こちらをのぞき込んでいる。

「……」

「そうやって、いつまでも逃げ続けるつもりかい？」

片手を軽く振ると、インキュベーターが潰れた。

潰した後で、ただの八つ当たりだったと気づく。

思わず攻撃してしまった。そんな事、今となつてはなんの意味もないというのに。

残骸が机に転がっていて、汚れが残ると大変だ。

澁々立ち上がって、乱れた髪を整える。

「逃げては居ないわ」「ただ、私はあの子と一緒にいない方がいいだけよ」

それが本心から来る言葉なのか、自分でもよく分からない。

ただ、私に分かるのは、まどかの未来に立ちふさがる物と戦う。誰の願いでもなく、自分の意志で戦わなければいけないという事だけだ。

ひしやげたインキュベーターの残骸を、ちりとりで拾い集めてゴミ袋へ捨てた。

「ひどい事をするんだね」

あきれ気味の声が聞こえても、今度は潰さなかった。

インキュベーターが戻ってきて、ゴミ袋に頭を入れている。まるで害虫だ。

そんな害虫でも、まどかに近寄らせなければ存在して貰わなないと困る。

「インキュベーター」

「？」

「渡すものがあるわ」

机を軽く拭いてから、インキュベーターに声をかける。

新品同然の紙袋と、ぼろぼろになった安っぽいビニール袋。粗雑な袋の方を掴み、中からチョコレートを取り出した。

「ほら、食べなさい」

「君がかい？ 珍しいね」

「他に渡す相手が居ないから」

不揃いでイビツなチョコレイト、そのうちの一つを投げて渡すと、見事に飛び跳ねて口でキャッチした。包み紙だけは吐き出して、中身を器用に口で転がす。

猫の様に飛び、チョコを咀嚼する姿は、見た目だけは愛くるしい。見た目だけは。

「……これは」

最初はただ普通に食べていたインキュベーターが、次第に口を動かすペースを落とす。

インキュベーターが顔をしかめた様に見えて、思わず笑みが漏れてしまう。

「苦すぎるんじゃないかな。それに、こっちは形も上手く固まらなかったのかい？ ああ、こっちは見た目でわかるね、一般常識から言えば、美味しくないと思うよ」

「失敗作だから当然よ」

そう、これは失敗作だ。人生初の手作りチョコレイトにして、ひどい間違いの塊だった。

人に食べて貰うには到底ひどすぎる出来映えに、自分でも落胆してしまう。

誰にあげられるでもない失敗チョコレイトの山。

せっかくバレンタインだから、せっかく体が健康になったんだから、チョコレイトを作ってみよう、なんて考えて、つい材料を揃えてしまった。

余計な事まで考えて、結局はチョコレイトの味を酷くするなんていう、ふざけた結末に至ってしまった。

けれど、それは言い訳だ。

今なら分かる。まどかにあげたくて仕方がなくて、自分を誤魔化して嘘をついてでも、作らずにはいられなかった。

もっと美味しい物を作って、まどかを喜ばせたくて、そんな気持ちでいっぱいになって、たまらなかった。

渡せない事を思い出した時には、たくさんの失敗作を生み出した後だったのだ。

一つつまんで食べてみれば、痛みにも似た苦みが走る。

「……本当に、酷い味」

とてもではないけれど、まどかや、知り合いに食べさせたい物ではない。

沢山作ってしまった自分が恨めしい。まだ、口の中で嫌な感じがする。

もう一つの袋に入っている物を食べて、口直ししてしまおうか。

自分で作った物は全てが失敗作だ。だけど、この袋の中身はきつと美味しい。

それは市販品で、ついさつき買ってきた物だった。

今の私が、まどかにチョコをあげていい様な存在ではない事に気づいたのは、まどかの顔を見た時だった。

まどかにあげたかった友チョコ。私が食べるのももったいなくて、でも、誰に渡せる訳でもない。

でも、せっかく買ったのに捨ててしまう事も無い。

「インキュベーター」

「これを、食べればいいのかな」

「こっちは駄目よ。失敗作の方はあげる」

ビニール袋の中に顔を入れると、インキュベーターは黙ってチョコを処理し始めた。

「もったいないわね」

しかし、やはり、今の私には渡せる相手が居ない。両親も、学校も、大切な人との関係だって、私は捨てている。

誰か、渡しても問題が無さそうな相手に渡してしまおうか。

例えば、佐倉杏子のベッドの上に置いておけば、勝手に気づいて食べるだろう。幾人か思い浮かべていると、一人だけ、顔も思い出せない誰かの声が頭の中で響いた。

『ほむら』

『あなたが好きよ』

知らない人間だ。出会った事もなければ、見た事もない。正真正銘、私とは無関係の人。

でも、これは恐らく円環の理から伝わった記憶だ。私ではなく、どこかの私が出会って知った、この私とは無関係の誰かの姿だった。

「……」

そつと窓の外を見て、かつて自分が居た病院を意識して、どこかの自分がバレンタインに出会った、名前も聞けなかった誰かの姿を思い浮かべはじめ。

顔を覚える前にやめた。

「……未練がましいわね」

誰に渡すまでもなく、自分で食べてしまえば、問題は起きようもない。

そう思つて、椅子の下の紙袋を持ち上げる。

魔女の結界に居た時、バレンタインになったらまどかにあげようと密かに狙っていた。そんなお店の、一番高いチョコレート。

私の甘さが産んだ、愚かな行動の象徴だった。

でも、きつと美味しい。店内の甘い香りを思いだし、味を想像してみると、心が柔らかくなつた気がする。

この気持ちも、甘みで少しは軽くなるかもしれない。

ちよつとした期待を胸に、紙袋を持ち上げた。

「？」

それは買つてきた時よりもやけに軽い。

まさか、と思つて中を見ると、チョコレート箱が無くなつていた。丁寧に梱包して貰つて、まどかが喜んでくれる様に綺麗なりぼんを巻いた箱は、今はもう見あたらない。

大きく振り向き、再び現れていたインキュベーターを見つめる。この場に居るのは私と、彼らだけだ。

「インキュベーター」

「何だい。僕はこのチョコを食べているんだ」

「あなた、ここに置いてあったチョコレートを知らないかしら」

「僕が食べたわけじゃないのは、確かだね」

口元にチョコの残骸を付着させながら、奴は興味なさげに返した。
「でしようね」

インキュベーターではないだろう。

信じる気はないけれど、奴らにとつて、チョコレート味の味に意味がないのは知っている。バレンタインの日を何とも思っていないのも、分かっている。

だとすれば、どこに？

誰に？

どこへ？

……なぜ？

「……まさか」

+

誰かが、私に一つの箱を差し出してくれた。

綺麗な包装紙に包まれた箱をわたしに見せて、受け取るのを待っている。

「これ、わたしに？」

突然の事なのに、不思議と驚かなかった。

むしろ、自然とその誰か、の前に立つて、突き出される箱を両手で受け取る。

「くれるんだね？　ありがとうー！」

両手でしっかりと掴んで、その箱を離さない様に抱いた。

そんなわたしの姿を見て、誰かが笑ってくれる。とても柔らかな雰
囲気で、わたしがここに居るだけでも、喜んでくれている気がした。

「じゃあ、これっ」

誰に渡す為に作ったのか分からないチョコレートを、その子に見せ

た。

きつとこの人に渡す為に作ったんだ。

「え、私に？」なんて表情で自分を指さす姿がなんだか面白くて、笑ってしまおう。

「うん、作ったの。わたしがじゃなくて、実はほとんどパパなんだけど……え？ そうかな？ えへへ、ありがとう」

一瞬驚いた様子で目を見開き、おずおずと、素敵な笑顔で受け取ってくれる。

その子は満足そうに微笑んで、そして、ふっと、消えた。

「あれ？」

髪が顔にかかる。

「あつ」

いつの間にか、髪を留めていたリボンが解けていた。

赤いリボンを軽く結びなおしてから、渡されたチョコレートをもう一度見つめた。

桃色の包装紙に紫のリボンが巻かれていて、真ん中には有名なブランドのマークがある。

見るからに、とても高そうなチョコレートだった。

わたしの手作りだけなんかじゃ、とてもじゃないけど釣り合いがとれない。

後でしっかりと礼を言わなきゃ、と。

「あれ？ 今の、誰だったっけ……？」

仁美ちゃんかな？ と考えて、もう貰っている事に気づく。

誰かの間違いで貰ったのかもしれない。そんな風にも思ったけれど、違う。確かにわたしにくれたチョコレートだった。

包装紙に、アルファベットでわたしの名前が入っていて、きらきら光っていたからだ。

破かない様に包みを開けると、箱は厚紙じゃなく、とても滑らかな手触りだった。

中に入ったチョコレートから、一番目の前にあつた物を手にとつ

て、眺めてみる。

よく見ると、わたしの名前が入った彫刻が刻まれていた。本当に、わたしの為だけに用意してくれた事が分かる。いつたい、誰がくれたんだろう。

わたしの作ったチョコで喜んでくれたら嬉しいけど、改めてお礼も言いたい。

誰がくれたのか、後でみんなに聞いてみよう。

チョコレートを口に入れながら、そう思った。

「んんー！ 美味しいっ……！」

それはとつても甘くて、柔らかくって。

思わず声が出ちゃうくらいに、幸せな味だった。